

Title	知覚標識を誘引とする学校防災におけるエコシステム形成の実証—徳島県鳴門市教育委員会の知識マネジメント—
Author(s)	真保, 亜紀
Citation	
Issue Date	2025-03
Type	Thesis or Dissertation
Text version	ETD
URL	http://hdl.handle.net/10119/19914
Rights	
Description	Supervisor: 郷右近 英臣, 先端科学技術研究科, 博士

要旨

本博士論文（以下、本論文という。）の目的は、知識マネジメント研究に知覚標識 [Merkmal] という新たな概念を位置づけることで、一人ひとりの知識を集団の知識としてマネジメントするための、サービスを基盤とする理論モデルを構築することにある。具体的には、フェーズフリーという防災価値の概念を学校教育に取り入れている、徳島県鳴門市の取り組みを対象として防災教育の普及プロセスを解明・検証する。この経験を通じて、サービス研究の分野に、多様なアクターのサービス交換を促進する概念を位置づけ、これを知覚標識 [Merkmal] という言葉によって説明する。

災害大国と呼ばれる我が国では、とりわけ東日本大震災による災害の教訓を受け、学校施設が地域に果たす機能の重要性が再認識されている。学校施設は避難場所としての機能とともに、学習の場として重要な役目を担っている。現在、我が国の殆どの小中学校で防災教育が実施されているが、その実施内容は各地域や各校に任されている。防災教育の専門家ではない教師が、防災教育を実施するためには、公的なポータルサイトや手引き、副読本や事例集などが豊富に存在し、数多の研究によって一定の効果が認められている。その一方で、教師の防災に対する知識が不足している、時間がない、カリキュラムのマンネリ化、実感のもたせ方がわからないというような現場の課題が、教育委員会を対象とした全国規模のアンケート調査から明らかになっている。

このような中、既存の防災教育研究の中心は、公的なカリキュラムに基づいた制度的（ステイック）な防災教育に光を当て、制度・枠組みの作り手の視点から防災教育を議論している。数多の研究者が公的なプログラムが防災教育の実施に影響を与えることを示唆している一方で、教師の創意工夫がそのような活動を推進することの実証的な検証はほとんどない。この現場目線での防災教育の体系化は、重要な課題の一つであると考えられるものの、先行研究では十分な議論がなされていない。そこで本研究では、フェーズフリー（Phase Free Concept: PFC）という防災価値の概念が、防災教育の実施に影響を与えるプロセスに光を当てることで、教師の創意工夫による学校防災の実現に関する議論の体系化を図る。PFC とは日常時と非常時という区別を取り払い、普段使用しているモノやサービスを非常時にも役立てるという考え方である。

本論文は、「なぜ鳴門市の学校防災で PFC 教育が制度化できたのか」という問いを立て、行政、教育委員会、教師など関係者のインタビューや教員研修のフィールドワークを中心に、2018 年からおよそ 6 年にわたる質的調査によって PFC 教育が制度化できた要因を分析した。その結果、PFC 教育のエコシステムにおいて、多様な教師の知識共有を促進する概念を発見した。本論文は、この概念を知覚標識 [Merkmal] と呼んでいる。知覚標識とは、あらゆるアクターにアクセス可能な合理性の<しるし>であり、サービス中心の交換の世界において資源密度を高める要点である。研究の成果として、学術的にはサービス研究における制度の議論に知覚標識を位置づける理論モデル（サービスエコシステムの調整モデル：Coordination Model of Service Ecosystem）を構築している。実践的には、教育委員会による知識マネジメントが地域社会の防災教育に貢献することを提示している。

キーワード：知覚標識・S-D logic・サービスエコシステム・フェーズフリー・知識マネジメント・防災教育